



Data

監督・脚本：ペール・フライ
 原作：マイケル・スーサン
 『Backstabbing for Beginners』
 出演：テオ・ジェームズ／ベン・キングズレー／ベルシム・ビルギン／ジャクリン・ビセツト

👁️👁️ みどころ

第41代大統領の“パパ・ブッシュ”の後を継ぐように第43代大統領になったジョージ・W・ブッシュは、2003年の多国籍軍によるイラク侵攻で名をなした。それには賛否両論あるが、その直前に国連が実施していた「石油・食料交換プログラム」におけるバグダッド・スキャンダルは言語道断！国連の権威を失墜させる不祥事だが、なぜ今それが映画に？

主人公は原作者の分身のような若者だが、彼は国連の一職員に過ぎず、外交官ではないはず。ところが、ストーリー（紹介）では？また、ハニートラップは中国の専売特許ではないから国連でも要注意だが、本作の主人公は？

問題提起性は十分だが、それがしっかり表現できていないのが残念。しかし、その結末をあなたはどう見る？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■バグダッド・スキャンダルとは？国連にも不正が！■□■

“パパ・ブッシュ”と呼ばれていた第41代アメリカ合衆国大統領ジョージ・H・W・ブッシュが去る11月30日に死亡したが、第43代大統領になったジョージ・W・ブッシュはその息子。彼は2003年3月の多国籍軍によるイラク侵攻を主導した大統領として有名だ。当時イラクを支配していたフセイン大統領が“大量破壊兵器”を保有しているというのがイラク開戦の最大の理由（口実）だったが、その後の調査ではどうもそれは存在しなかったらしい。すると、イラク侵攻とフセイン打倒の正当性は？

そんな“論点”はよく知られているが、その開戦直前の2000年代初頭にあったとされる“バグダッド・スキャンダル”を知っている日本人は誰もいないだろう。国連は1995年の“安保理決議986”に基いて、翌96年から「石油・食料交換プログラム」を

始めた。これは国連がイラクの石油を管理し、その販売金で食料を買い、それを市民に配給するという目的で始められた“人道支援計画”で、総額640億ドル（年間100億ドル）の予算が計上された。ところが、その中で不正、腐敗が横行し、少なくとも18億ドル（一説では200億ドル）以上の不正が判明したため、この「石油・食料交換プログラム」は2003年12月で打ち切られたらしい。なるほど、なるほど。国連史上最大のスキャンダルを小説にしたのは、マイケル・スーサン。そして、彼自身が国連職員として働いていた当時の体験を基に書いた小説を映画化したのが本作だが、なぜ今、そんなバグダッド・スキャンダルが映画に？

■□■外交官でない若者が、なぜ事務次長の特別補佐官に？■□■

本作の主人公は、原作者の分身のような(?)24歳の若者マイケル・サリバン(テオ・ジェームズ)。本作冒頭、マイケルが国連の職員採用試験に応募するシークエンスが登場する。しかしそこでは、父親が外交官として働き、ある事件で非業の死を遂げたことを良く知っている人物がマイケルと面接すると、一発で「採用！」と決まったから、この採用試験はかなりいい加減?また、国連の事務次長といえば事務総長の次の地位の偉い人だが、国連の職員として採用されるや否や、すぐにマイケルがその国連事務次長であるコスタ・パサリス(通称パシャ、ベン・キングズレー)の特別補佐官となり、国連がバグダッドで実施している「石油・食糧交換プログラム」の仕事に就くべく、パシャとともにバグダッド入りするのもb不可解かつ非現実的だ。私は司法試験を受ける時に外交官試験のことも調べたから、その試験の難しさはよく知っている。外交問題で活躍している日本の新旧外交官の顔ぶれを見ても、例えば田中均や宮家邦彦をはじめとするすごい官僚ばかりだ。

他方、国連の仕事をするのに外交官の資格が不可欠なのかどうかは知らないが、少なくともパシャや国連のバグダッドの女所長をしているクリスティーナ・デュブレ(ジャクリーン・ピセット)には、それは不可欠なはずだ。それに対して、マイケルに外交官の資格がないことは明らかだ。彼はあくまで国連の職員で、キャリアではないから、その権限はほとんどないはず。ところが、本作を観ていると、まるで、『スパイゲーム』(01年)、『シネマ1』23頁)でロバート・レッドフォード扮する師匠のネイサン・ミュアーが、ブラッド・ピット扮する弟子のトム・ビショップをCIAのスパイとして育成していたように、パシャがマイケルを自分の息子のように育成していたが、これってホント?原作者のマイケル・スーサンは、少し自分の存在価値を過大評価しているのでは……?

■□■前任者はなぜ死亡?ポストと所長どちらを信じるの?■□■

バグダッドにある国連の現地事務所です仕事をする職員が現地の言葉を喋れず、通訳をつけないければならないと言うのも変な話。小池百合子東京都知事でもアラビア語はしゃべれる(?)のだから、国連のバグダッド事務所働く以上、アラビア語ぐらいしゃべれな

れば……。そんな点でも、私は原作の信ぴょう性にいささか疑問があるが、それはさておき、マイケルは通訳の女性ナシーム・フセイニ（ベルシム・ビルギン）から、前任者の死亡はある情報を知ったせいで殺されたに違いない、と聞かされたからビックリ。

他方、パシヤの下で仕事をしていても、パシヤとデュプレは「石油・食糧交換プログラム」がホントに機能しているのか、それとも事実上破綻しているのか、について根本的に対立していることがわかったから、右往左往することに。もちろん、国連事務次長のパシヤは機能していると主張していたが、破綻しているという報告書をデュプレが公にすれば、たちまちパシヤの地位が危うくなること必至だ。どんな組織でも組織内の権力闘争があるのは当然だが、国連のバグダッド事務所内にそんな権力闘争があることを知る中で、マイケルはパシヤから「数日後にある写真が届く。それをデュプレに見せるように仕組め」と指示されたが、それはデュプレを追い落とすための策略だったから、アレレ……。国連の事務次長が、自分の立場を守るためにそんなことをしてもいいの……？

そんな疑問をもつ若いマイケルに対して、パシヤはそれもこれも国連のため、「石油・食糧交換プログラム」を成功させるため、とくり返し説明していたが、マイケルはパシヤとデュプレ、どちらを信じればいいのか？

■□■これは真実の愛？それともハニートラップ？■□■

私は社会問題提起作が大好きだから、イラク戦争開戦前夜に国連で起きた「バグダッド・スキャンダル」をテーマにした本作に期待していた。しかし、本作では、マイケルがあまりに単純すぎることに、通訳のナシームとの“真実の愛”とも“ハニートラップ”ともとれる恋愛劇のウエイトが大きすぎるのが残念。そりゃ、ナシームは最初見たときから、意思が強く、賢そうな女性だから、魅力的なことはよくわかるが、マイケルには初任地でのハードな任務がいっぱいあるのだから、その処理に集中しなければならないのは当然。ところが、ナシームの故郷であるイラク北部のクルディスタンに行き、フセイニに殺された多数のクルド人墓地を見ると、クルド人である彼女の苦しみを理解する中で、一気に2人の（男女の）愛が深まっていくからアレレ。また、マイケルがマイケルなら、ナシームもナシーム。死亡した前任者のアベックが命をかけてナシームに託した重要なデータを、数回会っただけのマイケルに渡したのは、少し軽率なのは……？

本作中盤はそんな風にマイケルとナシームとの男女関係を軸とした個人的な感情にウエイトが置かれるため、デュプレの死亡という大問題があまりにサラリと描かれてしまっている。単なる一職員にすぎないアベックの死亡とは異なり、国連のバグダッド所長であるデュプレの死亡は大事件で殺人事件の疑惑もあるはずだが、本作はそこには踏み込まず、パシヤが主導する「石油・食料交換プログラム」の問題点が何ら提起されることなく、再び進行していくことになる。そして、それを国連安全保障理事会総会でマイケルが発表するという大役を仰せつかるのだが、これも不自然。だって何度も言うように、マイケルは

外交官ではなく単なる新米の一職員にすぎないのだから。ちなみに、パンフレットのストーリー紹介には、それについて「外交官として最高の榮譽を経験できたはずのマイケルだが心が軽くなることはなかった」と書かれているが、これは一体なぜ？これは明らかな誤記？それとも、マイケルが身分詐称を頼んだの？

■□■データの解析を義兄に依頼！それでOK？■□■

現在、日産のゴーン会長が日産側に提供させていたブラジル・リオデジャネイロのマンション内に3つの金庫があることが判明し、ゴーンのプロ族たちがその引き渡しの仮処分を提起した。リオデジャネイロの裁判所は一旦その仮処分を認めたが、日産側の異議申立てを受けて却下したと伝えられている。さて、その金庫の中にはいかなる書類が入っているの？また、対イランへの制裁逃れに関与した疑いによって、12月1日にカナダのバンクーバーで逮捕された中国の通信機器大手「華為技術（ファーウェイ）」の孟晩舟CFO（最高財務責任者）は12月11日、日本円で約8億5000万円の保釈金で保釈されたが、さてファーウェイの本社にはいかなる重要データが保存されているの？

そう考えると、アベックが命を賭して守ったファイル（SDカード）の中にはバグダッド・スキヤンダルに関する重要データが入っているはず。しかし、それには二重、三重の安全装置がかけられているから、その解析は素人の手に負えるものではないはず。CIAやFBIが介入すればその解析は可能だろうが、ナシームからそれを入手したマイケルが“その方面”に詳しい義兄に依頼したくらいでは、到底その解析はムリ。そう思っていたが、当初は苦勞したもの、やがて義兄から「解明できた」と言ってきたから、アレレ。ホントにそんなに簡単に解析できたの？しかして、その解析結果は驚くべきもので、何とパシャも莫大なリベートをもらっていたことが判明。俺は一体国連の職員としてこれまで何をしてきたんだ！と後悔しつつ、マイケルはこれを公にしようと考えたが、さて・・・？

他方、12月14日付新聞各紙は、トランプ大統領の不倫相手だったとされる女性に高額の口止め料の支払いを肩代わりしたことが選挙資金法違反などの罪に問われていた、トランプ大統領の元顧問弁護士であったマイケル・コーエンに対して、禁錮3年の実刑判決が下されたことを報道した。しかし、トランプ大統領は自らに責任があることは全く認めず、「コーエンに法を犯せと指示したことはない。彼は法的な助言をするために雇われた法律家であり、もし間違いを犯したのならば彼自身が責任を負わなければならない」「大統領をおとしめ、自分の刑期を短くするために認めただけだ」とツイッターで述べている。そんなことを考えると、国連の一職員にすぎないマイケルがバグダッド・スキヤンダルをいかに暴露しようとしても、上からの圧力で潰されるだけ？さあ、本作ラストにみるマイケルの決断と行動は？それは、あなた自信の目でしっかりと！

2018（平成30）年12月13日記